まちづくりひろしま
被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第２９号（平成２９年５月１５日）
読者数：５８１名（募集中）
ﾒｰﾙ：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

□ 巻頭言

# ７２年目からの平和都市

ANT-Hiroshima 理事長
渡部朋子

## 広島の力を活かす街づくりへ―３つの提案―

原爆により廃墟となった広島が、今日の復興を成し遂げることができたのは、被爆直後から始まった、被爆者の方々の筆舌に尽くし難い、生へのたゆまぬ努力と不屈の闘志の賜物だと思う。私の父母もその中の一人である。しかし、被爆から 72 年の時を経て、次第に被爆者の方々がその生き様を語り続けることが難しくなってきている。はたして、被爆者亡き後、広島は平和都市として在り続けることができるだろうか。今、私たちは大きな歴史の転換点に立っていると思う。

私は、仕事柄、様々な国の人々を広島へ迎え、ヒロシマを伝え、広島の街を案内する。ある時、紛争地からやって来た友人が、突然、道端で立ち止まって、心から感動したように話した。「なんて平和なんだ」。何でもない広島の街角での出来事である。私の方が、驚き、戸惑い、そして友人の様子に心揺さぶられた。私はあらためて、広島の持つ、はかりしれない力を実感した。この広島の地には、平和をつくりだす力がある。この力を活かして、世界各地で苦闘しながら生きている人々に、対話と和解を育む場を、ここ広島で提供できれば、平和都市としての Hiroshima の名前は、世界の人々の心にとどまるはずである。また多くの人々が行き交う国際平和文化都市として、これからも発展し続けるだろう。

私は心から願う。この広島に生まれ、この広島に育てていただいた人間の一人として、平和都市広島（国際平和文化都市・広島）をより豊かに発展させて、次の世代に手渡したい、と。また、いつまでも世界の人々が「Hiroshima」という名前に「希望」と「平和」を感じられる都市であり続けたい、と。そして何より、広島に生まれ育った子どもたちが、「広島」を誇りに思い、平和の担い手として育ってほしい、と。この３つの願いを叶えるために、私たちはこれからの広島をどのように思い描き、努力すればよいのか考えてみた。

## 広島の力を活かすための提案＜１＞―世界に開かれた学校―

世界各地で核兵器廃絶のため、あるいは平和構築のために働く人材を、ここ広島で育成したい。そのために、広島に公立のインターナショナルスクールを開校してはどうだろう。その素地はすでにあると思う。平和の軸線上にある広島市立基町小学校は、今や生徒の半数が外国にルーツを持つ子どもたちである。基町小学校では、すでに長年に渡り、平和と多文化共生をキーワードに教育実践を積み重ねている。こうした経験を元に、世界に開かれた学校をつくれば、多様な「人財」が世界中から広島に集まり、そして平和構築のための教育を受けた後に、世界各地へと輩出され、広島は『世界の平和首都 Hiroshima』になるだろう。

基町遠景、撮影松浦康高氏

## 広島の力を活かすための提案＜２＞―被爆樹木を活かした街づくり―みどりと平和―

広島は水とみどりの街として美しく甦っている。平和公園を中心に、広島の街にはいくつもの川が流れ、川沿いの木々には豊かな緑が生い茂る。そのそばで音楽、スポーツ、アートなど様々なイベントが行われ、そこに憩う人々の姿は、まさに平和の風景そのものだ。

そうした風景の中に、ごく自然に被爆樹木は存在している。現在、広島には、161 本の原爆を生き延びた木々があり、爆心地から半径２km 以内のそれらの木々が「被爆樹木」として広島市に認定されている。被爆樹木は 72 年前の深い傷痕を自らの内側に包み込み、雄々しく静かに街の中に生きている。近年、筑波大学の鈴木教授や樹木医の堀口力さんらの調査によって、被爆樹木のうち、a 型として分類されているもの＜幹が一本立ちで被爆後に地上部が残り、他の場所に移植されなかった 30 本余りの木々＞が、自らの身体で爆心地の方向を指し示すように傾いていることが分かった。日本造園学会でも、その研究成果が発表され、さらに、広島・長崎両市において研究調査は続いている。

草木も生えぬ、と言われた被爆後のヒロシマに、苦しみに耐えて生き残り、新しく芽吹いた命。もの言わぬ被爆樹木が、私たちに伝えるメッセージは深遠だ。その存在と価値を、まずは広島に暮らす私たち自身が知り、広島の宝として、樹木の尊厳を守りつつ保全する。そして世界中に発信する。そうすれば、広島を訪れた人は誰でも、みどりを通じて『平和・希望・共生』を感じ、自らのうちに平和の種を育むだろう。

## 広島の力を活かすための提言＜３＞―街に歴史を刻む―

本年から本格的に、被爆建物や遺構が保存されるという。とても大切なことだと思う。もの言わぬ建物や遺構から、私たちはどうすれば想像力を膨らませて、その声なき声を聞き取ることができるのか。ただそのそばに立って、見て、触って、想像するだけでもよいかもしれない。しかし、さらに一歩進んで、それらの建物と人との関わりの「ものがたり」を知ったとき、より深く心に突き刺さるのではないだろうか。

例えば、現存する被爆建物のそばに、その建物の歴史的背景を説明したプレートを設置するのはどうだろう。その建物がいつ、何の目的で建てられたのか、そこでどんな人がどんなことをしていたのか、その場所にどんな日常のドラマがあったのか。そしてそれぞれの被爆建物や遺構の説明プレートには、すべてに共通するシンボリックなキャッチフレーズをつけたい。例えば『忘れない８・６』というような。広島市民の強い意志が、街のいろんな場所で感じられるように…。

また一方で、被爆建物・遺構の存在や歴史を、観光客はもちろん、市民にも周知していきたい。子どもも大人も、その地域に暮らす人たちが、身近にある被爆建物の存在を知り、自分の言葉で語れるように。街は人々の営みの集積である。今の私たちの暮らしが、何十年、何百年も前の広島の人々の暮らしとつながっていることを、被爆建物を通して実感できたとき、歴史を教訓としてより良い未来を創造していくことが可能になるはずだ。私も、街に歴史を刻む一市民として、これまでもこれからも、丁寧に働き、生きていきたいと思う。

*ひろしまのまちづくりの動き*

### *○ 猿猴橋の「川の駅」完成*

広島県・市が連携して広島駅南口に建つビッグフロントひろしま前の河岸緑地を整備し、「川の駅」として水上交通の発着点や人が賑わう広場が完成。３月２５日に昨年復元した猿猴橋をシンボルとした祭「えんこうさん」と合わせて河岸緑地の完成式典を開催。

河岸緑地は、観光客や水辺を訪れる人たちが憩える休憩所、イベントなどに使用できる多目的スペースや芝生広場を整備。ミニコンサート、フリーマーケット、移動販売車等による飲食なども可能。
地域住民の交流の場として朝市やカフェなども定期的に開催予定。

『水の都広島』の玄関口にふさわしい象徴的な水辺空間が誕生したことは、駅周辺のブランドを高めることが期待できる。

位置図

イメージ図

## ○ 広島の復興の軌跡・人物編（第４回）～知られざる業績の渡辺忠雄市長～

広島市長列伝ということになれば、実は欠かせない市長がいる。私の蓄積した情報・資料の中で綴ってみたい(以下敬称省略)。

広島の戦後復興期における市長と言えば、すぐに濱井信三という名前を挙げるであろう。濱井市長なくしては広島の戦後は語れないといっても、決して過言ではない。ところが、その濱井市長に続いて昭和 30 年 4 月に当選した渡辺忠雄という市長がいたことは、あまり知られていないし、ましてその業績はほとんど知られていない。中国新聞社編「広島県大百科事典」においても、「浜井信三」「山田節男」の項目掲載はあるが、「渡辺忠雄」の記載は無いのである。

### ◆　西部開発の起源、大広島計画

現在、商工センターと呼ばれる地域は、かつては西部開発といわれた大規模開発であるが、これは山田節男市長が心血を注いで実現したと前号（第 28 号）で触れられている。ところがこの発想の起源は、渡辺市長時代に策定された大広島計画なのである。「広島市西部開発事業誌」p. 118 によれば「広島市総合企画本部が、昭和 33 年 11 月に出した『臨海地帯埋立による土地造成計画』によると、庚午、草津、井口沖にも埋立が計画されており、これが戦後最初の埋立計画であって、戦前の広島工業港の計画を引き継ぎ、さらに現在の西部開発埋立計画の前身的計画をなすものである」と記されている。昭和 33 年とはまさに渡辺市政下にあった。

### ◆　百メートル道路の問題と緑化推進

渡辺新市長 第一声を放つ
"ガラス張りの市政を"
百米道路の幅を半分に
ボス封じに充
税を軽減、市

渡辺忠雄に関連しては、昭和 30 年における市長選で、「百米道路の幅を半分にしてアパートを建てる」という公約を掲げて当選したと、広島の復興史の中では有名なエピソードがある。それ以外の公約もあるが、いずれも復興事業によって被害を受けるという批判的な市民に支持されて当選したということである。結果的には当時の佐々木銑建設局長らによって説得されて、百米道路縮小案は撤回され、基町の中央公園の北側部分が転用されて公営住宅が建設された。このことの評価はいろいろあるが、いずれにしても記憶されてしかるべきことであろう。

ところで、この百米道路の縮小問題は、渡辺市長自身に発想の転換をもたらした。百米道路が市民に評判よくないのは、そこが埃っぽく殺風景で、魅力が無いからであり、緑化して景観を整えれば親しんでくれるであろうと考え、積極的に緑化するため、昭和 31 年 2 月から 32 年度にかけて各地から苗木等を提供していただく供木運動（または献木運動）を進めたのである。かくして、県内だけでなく各地から苗木、樹木の寄贈提供を受け入れ、グリーベルトに植樹していき、見違えるような道路になっていった。このことは、百米道路が次第に市民の馴染むところとなった大きな要因でもある。

寄贈者名簿

### ◆　各種施設の開館、建設、再建を推進

渡辺市長自身の業績といえないかもしれないが、渡辺市政下で実現していったものがある。

昭和 30 年 8 月 24 日に原爆資料館が開館した。これより先、広島市公会堂が完成しており、平和記念館本館も次いだ。これらは濱井市政下での長期建設を経て、渡辺市政下で実現したものである。

昭和 32 年 7 月に広島市民球場が完成した。これも濱井市政下で既に建設構想は存在したが、濱井は市長選で積極的に推進を訴えなかったのであり、市長選後、二葉会の力を借りながらも、短期間で建設にこぎ着けたのは、渡辺市長のリーダーシップが大といえる。

昭和 33 年 3 月、天守閣が再建された。準備は以前から進められていたとはいえ、大事業であった。市長就任３年で完成に至ったのであるから、渡辺市長の役割は小さくないであろう。

そしてこの天守閣再建に関連して実施されたのが、昭和 33 年 4 月 1 日から 5 月 20 日まで開催された「広島復興大博覧会」であった。これこそ渡辺市政下のメインイベントであった。復興博後の報告書「広島復興大博覧会誌」の「発刊のことば」で、渡辺は「昭和三十三年は（中略）、この機会に概ね出来上がった広島市の復興状況を、広く国の内外に紹介いたしますとともに（中略）、万難を排して、広島大博覧会を開くことを計画、おおよそ一ケ年の準備期間を経て昭和三十三年の陽春四月一日を期し、華やかに開会したのであります。（以下略）」と誇らしく述べている。その他前後するが、昭和 31 年 12 月 17 日における「一団地の住宅施設の指定」とそれに続く 32 年度より基町の住宅団地中層建設開始があり、昭和 33 年 9 月 16 日の「一団地の官公庁施設の指定」の実績を指摘しておこう。

◆　濱井による渡辺批評と現代的課題

濱井著「原爆市長」によると「渡辺候補は、私がやむなくとった土地区画整理の強制執行に対し、『市民が納得しないのに強制的に立退かせるのは、民主主義ではない』と演説する」ことで当選し、任期中には「一部の市民の抵抗があるような事業は、すべて手が付けられない状態であった」と批判される。渡辺市長の姿勢から学ぶべきこともあるが、問題もまた指摘できる。すなわち、もしその時の市民の直接的、短期的利害意識に従うならば、平和大通りだけでなく復興事業も実現しなかったかもしれないのであり、このようなポピュリズムに通ずる世論形成をいかにして克服するか、そういう課題が顕著になった時代であり、それは今なお、直面したままである。

◆　山県郡大朝町出身。昭和３年以来弁護士。被爆者。昭和 21 年第 22 回総選挙で自由党から立候補、当選するも公職追放。その後も幾度か立候補、落選。昭和 30 年 5 月～34 年 5 月第 22 代広島市長。34 年も市長選に立候補するが落選。昭和 55 年 5 月 6 日逝去、享年８１歳。

（編集委員　石丸紀興）

**＜参考文献＞　濱井信三著「原爆市長」（朝日新聞社、昭和 42 年）、「広島被爆 40 年史／都市の復興」（広島市、昭和 60 年）、ホームページ** http://masuda901.web.fc2.com/page04cax3.html　**他。**

## □ほっとコーナー　『７０歳のメイクアップアーティスト』

ナチュラルクリエイティブメーカー有限会社　坂井由紀子

化粧筆で有名な熊野町に７０歳のメイクアップアーティストがいます。
毎年、筆の里工房のイベントで、訪れるお客様に丁寧に化粧筆の使い方を説明します。
普段は足元がよろよろしていて背中が曲がっていても化粧筆を持つと
シャキーン！とし、長年培ったメイクアップテクニックをレクチャー
７０歳とは思えません。
他のスタッフは疲れてこっそり座っていても（私のことです(+_+)）
１日中立ちっぱなしで、訪れたお客様にお声がけします。
お客様にメイクアップすることが本当に楽しい！と休みません。

２０代で化粧品店を開業。まだまだ有名でなかった熊野筆を全国の
化粧品仲間に宣伝し、化粧筆について筆屋さんにアドバイスしてきました。
その功績が認められ筆文化復興功労者として昨年表彰されましたが
最近、体力と気力ともメキメキ落ち残念に思っていました。
なのに化粧筆を持つと大変身！！これもメイクアップの力なのかしら…？！

とにかく化粧筆を使ってみなさんにきれいになってもらいたい私の母
以前入院した時も病院がメイクアップ教室になっていましたから。
入院していた方の娘さんが「メイクしてもらって久しぶりに笑顔をみました。」と
メイクアップの力ってすごいな。それともうちの母がすごいのかな。
これからはデイケアでまた沢山の人を素敵に幸せにしてほしいです。

## ○「時代を語り建築を語る会（第１６回）」報告

### 語り人：濱井義樹氏（呉市都市部参事）

### ～呉市における都市政策を語る－過去から現在・未来に向けて～

長年呉の都市行政に携わっている濱井氏と大学時代の恩師である石丸氏が対談形式で呉の都市問題等について語り合った。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2017 年 3 月 25 日（土）18:00～19:45

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ

略歴:呉市出身
1980 年 広島大学工学部建築学科卒、同年呉市役所に入り、営繕課、都市計画課、 交通政策課、総務企画部等を経て 2017 年 4 月から現職。
広島県建築士会呉地区支部副支部長

☆ **呉市の歩み**（濱井）

・明治の初年までは半農半漁の村落。明治２２年に呉鎮守府が開庁し、同３６年に海軍工廠が置かれ、本格的な海軍軍事基地となる。

・明治３５年に呉市誕生。累次の基地拡張により人口が急増し、鉄道、電車、道路、水道等の都市基盤整備も進む。昭和３年に３町を合併。昭和１６年には軍の意向により広村他１町を合併し、先の大戦中は広島をしのぐ人口４０万人で敗戦を迎える。

・戦後は中心市街地が空襲で焼け野原となり、英連邦占領軍に広大な軍用地等を接収されたため人口も１５万人に激減する。

・昭和２５年に旧軍港市転換法（以下**軍転法**）が公布。軍用地の民間への払い下げが行われ、造船・鉄鋼・機械金属・パルプ等の企業が進出し、海軍工廠時代の技術力が活かされて有数の臨海工業都市へと発展する。

・昭和３１年に周辺３町村を合併して旧呉市を形成。同年に英連邦軍撤退。同４０年代半ばまでは景気が良かったが、以降は停滞気味。

・全国的な平成の大合併の動きの中で、平成１５年に１町、同１６年に１町、同１７年に島しょ部６町を合併して今の新生呉市を形成。旧市と比べて区域が倍以上になり、人口も２５万人に増えたが、島しょ部等では高齢化が進んで人口も減少し、現在は２３万人である。

☆ **論点提起**

・映画「この世界の片隅に」に戦前の呉のまち並みが描写。数多くの空襲を受けたことを含め、呉の案内をしたら？→大きな病院や軍関連施設等は空爆の対象から除外され、後に利用。

・軍転法の目的は、「旧軍港市を平和産業港湾都市に転換して平和日本の実現に寄与すること」であるが、呉市の対応は?→軍転法の制定が国有地・軍用地の払い下げに主眼があり、多くは民間に払い下げられたため、他市と比べると平和目的の取り組みが弱い。

・宝町の開発は？→平成６年に呉地方拠点都市地域に指定され、そのコア地区。埋立てを先行し、大和ミュージアムは後から計画。残地をいずみに売却し、ゆめタウンを建設。

・呉市は日本で２番目に長い海岸線を持つが、その活用策は？→島の海沿いの道は県道で維持管理しかない。ハード面の整備は無理なので、サイクリングの活用程度しか考えていない。

・空き家、斜面地対策は？→直近の住宅統計調査で空き家が２万８千戸と発表されビックリ。そのうち戸建ては１万２千戸。精査すると、完全な空き家は４千８百戸、そのうち修繕・解体等が必要なのは３６０戸程度。今年度から空き家の除却費用に助成制度あり。

☆ **会場からの質疑応答**（質問者？→ 回答・濱井）

・中心商店街の空き店舗、空き地に対する都市施策は？→空き店舗になっても所有者に危機感がない。市が借りて物産品店を出したが、採算が取れなければ続かない。最近代替わりして若いリーダーが育ってきたので、これからに期待したい。

・近代化遺産等が多くあるが、歴史まちづくり計画等の取り組みは？→工場群の中には戦艦大和を作った大屋根や砲塔・砲身を作った御影石の立派な円形ピット等が残っているが、稼働中なので一般公開できない。自衛隊関係の施設も許可がなければ見学できない。古いものを残して市の資産として活用していこうという機運がまだない。

☆ **まとめ**（石丸）

宝が転がっていても、活用策を考える主体や組織・システムが育っていない感じ。観光ルートの開発や海岸線の提案等にもっと取り組んでほしい。　　（編集委員　瀧口信二）

## ○ *人物登場：中村　圭氏*（広島市立大学芸術学部講師）

今回は基町住宅地区の活性化のために大学講師の立場で基町プロジェクトを牽引している人に登場してもらった。

略歴：1975 年大分県生まれ。2003 年広島市立大大学院修了後、同大学に残り、現在講師

☆ これまでの軌跡

大分に生まれ育つ。大学進学時に希望するデザイン系の大学が近くになく、１９９４年に開校した広島市立大学に第１期生として入学。大学院修了後も無給の協力研究員として大学に残り、非常勤助教を経て現在に至る。

自分たちのアート作品の展示会場を探しているうちに広島のまちを知り、興味を持つようになる。外から来た人間として相生通から南側の平和記念公園と原爆ドームは知っていたが、北側のことは関心がなかった。

２００９年に市民球場が移転して跡地利用の検討がなされ始め、自分たちも大学仲間とアートの側面から『Hiroshima Creative Park』を提案。平和記念資料館や原爆ドームを見た後は、描いたり、歌ったり、踊ったり、若者が躍動し、広島の未来を感じさせる場が中央公園側に求められている。

☆ 基町プロジェクトとの出会い

２０１３年に市が策定した「基町住宅地区活性化計画」のメニューの一つに掲げられた「アートによる魅力づくり」の関係から市立大学芸術学部に依頼があり、翌年度から中区役所と連携して試験的な「基町プロジェクト」の活動を開始。

２０１５年に「**創造的な文化芸術活動で基町住宅地区の魅力づくり・活性化を目指す**」というプロジェクトの基本コンセプトを策定し、長期的な目標を見据えた活動をスタート。

☆ 基町プロジェクトとは

プロジェクトの目標を達成するため、市立大学の特徴を生かした「学び」「創造」「交流」の３つの場づくりに取り組んでいる。

**学びの場**は、地区内に幼稚園や小学校があり、近くに高等学校もあるので、市内の他大学とも協働してワークショップなど若者の学びの機会を作り、地域の人材育成に寄与。

**創造の場**は、空き店舗の活用など若いクリエイターの活動を支援する環境を提供し、その成果を地域に還元。またクリエイターの雇用の機会の創出も目指す。

**交流の場**は、基町をテーマにした作品展示会やシンポジウムなど地区内外の人たちの交流の機会を作り、また地区内には外国籍の人が多いので、多様な文化が交流する場を創出。

・基町プロジェクトの活動拠点

空き店舗を改修して活動拠点「Ｍ９８」（基町のMに室番号）を開設し、２名のスタッフが週３日程度常駐。住民から地域の一員として認められ、地域の抱える問題や要望を聞きながら、３つの場づくりの実務を行っている。

・地域住民との関わり

スタッフの日常的な付き合いのほか、もとまちカフェと称して移動式屋台などを持ち込み、住民や内外の人たちとの交流の場に役立てている。

昨年から調理場を使った食のイベントに住民の参加者が増えている。今年からは地域包括支援センター「ほのぼの」と連携して一緒に活動することにより地域との関わりを深めていく。

・これからの展望

過去３年間の活動は試行錯誤的なイベント型が多かった。これからは単発で終わるのではなく、次に残ってつながるものにしたい。例えば、地区の模型も作って終わりではなく、地区の紹介用に展示されたり、将来像の検討用に利用されたり等々。

商店街の空き店舗に若い人が進出してアート活動などの拠点になるような支援もしたい。

☆ 個人的な抱負

原爆ドームを中心に据え、『平和と慰霊』の平和記念公園エリアと『創造と復興』の中央公園エリアが一体となって広島のメッセージが発信できると考えており、その理想像を描きたい。

*＊コメント＊*

広島の中心地のことを考えているグループが他にもあるので、ネットワーク化して協働できるようになればよいと思う。

聞き手：編集委員　前岡智之、瀧口信二（文責）

## ○ ひろしま市民ひろばの提案！

広島カープが誕生した広島市民球場。移転してからすでに５年以上経過したが、都心の再生に向けた有効活用が期待されながらも未だに具体的な方針に至っていない。それは、跡地をとりまく中央公園全体のグランドデザインの欠如が個々の方針決定を流動的にする原因である。

日本建築家協会中国支部広島地域会のまちづくり委員会は、グランドデザインの提案を続けている。これまでに、当面のひろば整備、市民プールの移設、公共建築の再編整備、サッカー場計画などを段階的に整備する計画案を紹介してきた。

今回は、川沿いの民間施設が移転した後の姿、「ひろしま市民ひろば」の計画案を提案する。

### ステップ６．ひろしま市民ひろばの計画案

ひろしま市民ひろばの計画案

**☆ 都心再生の起爆剤となるひろば整備を**

平和公園から中央公園に至る区域は、隣接する河川空間と合わせると面積 200 ha を超える広島の都心コア空間を形成している。この地域の被曝 100 年におけるグランドデザインを描くためには、時を超える夢のある空間構成の骨格が必須である。

この地域は元安川に沿って南に平和記念公園ゾーン、北に広島中央公園で構成し、都心の商業業務地域と隣接している。この２つのゾーンは、世界最初の被爆地である広島の国際平和文化都市としての復興を実証していく役割を担っているが、これまで役割は理解しながらも戦後の着の身着のままの復興の中で、中央公園ゾーンは計画的、総合的な空間構成が形成されていない。

目標年（2045 年、28 年後）には、既存の施設のほとんどは耐用年限を超える。今、この時点で目標を定め、総合的に段階的に再編するプロセスが必要である。

中でも「ひろしま市民ひろば（旧広島市民球場跡地及び周辺地区）」は、世界遺産の原爆ドームと相対し、２つのゾーンの鼎の意味をもつ地区である。地域全体が活発に利用されるには、利用客を吸引し発散するエネルギーの源、いわゆる「心臓の役割」を果たしていく必要がある。そのためには、**固定的な機能やある特定の施設ではなく、自由に誰でもいつでも利用できる空間でありたい。**

**☆ ひろばは、周囲との関係で成り立つ**

施設跡地はその施設が無くなると求心性が失われ、周囲との関係が失われる。跡地の利用を考える時、改めて周囲の施設との関連を組立てることが必要となる。すなわち、球場と各施設の背面関係が、ひろばの形成により正面関係に大きく変化するのである。

現状は、東面はメルパルク広島と SOGO の駐車場、NTT 基町通信センタービル、NTT 基町ビルが建ち、3 階のバスセンターに登るスロープにより裏側となっている。

西面は広島商工会議所ビル、駐車場、PL 広島中央教会、広島市青少年センターが建ち、それぞれひろばに背を向けている。南面は幾らかの緑地のほか電車道に開け、原爆ドーム、平和記念公園と繋がり、ひろばに向いている。北面は広島市こども文化科学館、広島市市民プール、広島県立体育館があり、緑地が広がっている。

ひろばを描くには、これら周辺施設の変化と相互関係を紐解かなければならない。

**①ガラガラポーン再開発**

メルパルク広島を除く東面地区を法定容積 900%に高度利用する。ここに従前権利床の NTT 施設のほか、保留床として西面にある広島商工会議所ビル、駐車場とともに 3 階にバスセンターを収容し、さらに商業業務施設、公共施設等を含む複合ビルとして再開発する。現在の広島商工会議所ビル、駐車場、PL 広島中央教会は広島市が取得し、広島中央公園に編入する。

②高潮対策護岸の利用

川沿い一帯が公園に編入されるとひろばは元安川に大きく開かれるが、３メートル程度の土手があり、ここはなだらかな変化のあるスロープとする。

③公共施設の再整備

やがて耐用年限を迎える広島市こども文化科学館、広島市市民プール、広島県立体育館、市立図書館や映像文化ライブラリーはこれからの新しい文化、科学、国際、こども施設へと再編し、段階的に整備する。

④原爆ドームのあるエリアと地下通路により連結

広島商工会議所ビル、駐車場、PL 広島中央教会の移設に伴い、ひろばの地盤から３メートルほど下げた広い地下通路を整備する。また、地下商業施設シャレオをここまで延伸する。

⑤ガレリアによる SOGO やセンター街との連結

ペデストリアンデッキにより人・車の動線を分離することにより、公園全体に回遊性を与える歩行者ネットワークを整備する。

☆ 参加しやすいひろしま市民ひろばの空間構成

電車通りのレベルで広がる多目的利用のひろばとする。東面のガラガラポーン再開発施設や北面の複合型公共施設により囲まれ、西面はなだらかなスロープを経て元安川に広がる。

*２０４５年〇月〇日は、秋晴れの日曜日、我が家は朝からうきうき！*

今日は家族みんなで「ひろしま市民ひろば」に行きます。あの広島市民球場のあったところ、バスセンターにつながっているので、家の前のバス停からほんの 20 分で着きます。

今日はコンサートです。ここでは毎日のようにいろんな楽しいイベントがあり、誰でもいつでも参加できます。ひと遊びしたあとは、お昼を元安川の河岸に座って食べます。ここにはいろんなお店があるので、眺めながら歩いてみるだけでも楽しいし、雁木ボートに乗って白島まで行ってみるのもいいですね。

最近できた子ども文化科学館には、世界一のプラネタリウムがあります。今日は世界の恐竜が展示されているとか、また青少年センターでは市民ミュージカルがあるようです。図書館も新しくなって世界の図書館とオンライン化しました。

最近は、平和記念公園を訪れる外国客の方がこちらの中央公園に必ず立ち寄ります。特に子供たちには人気があるようで、この間も英語で話しかけられてびっくりしました。近くにいた人が通訳してくれて、話すことができました。

これからも暮らしを豊かで楽しいものとし、世界の人々と交流することにより、愛着のもてるひろしまのまちとなっていくといいなぁ。

（日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会　前岡智之）

## ○ こまちなみシリーズ ⑯

金沢市はまちの歴史を色濃く残した、ちょっとした町並みを「こまちなみ」として守り、育てるまちづくりを進めている。これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介してきたが、市内周辺から広島県内に対象を広げていく。

### 旧海軍の町・呉～空襲を受けた街にこまちなみはあるのか？～

呉って軍都、軍港の町、敗戦前に空襲を受けたし、こまちなみってあるのかな？と思いながらも何の下調べもせずにＪＲ呉線の快速ライナーに乗った。

３０分で呉着、まずは観光協会で話を聞こう。今は便利な時代、スマホに「呉観光協会」と入力すると道順表示、連れて行ってくれる。

「スミマセン」、窓口で声を掛けるとパソコンを打っていた男性がこちらを向き「何でしょう？」、これこれ云々…問い合わせの主旨を告げると、「呉の中心部は空襲を受けて

「この世界の片隅に」ロケ地マップ

古い町並みは残っていませんよ」と言いながらも、大ヒット中の「この世界の片隅に」のロケ地マップを持って来て、「ここから歩いて１０分のところ、長ノ木に国の重文・澤原邸がありますよ」と、そこに帰ってきたのが観光協会の広報担当の平田己恵子さん。代わっていろいろ話を聞くことができた。

澤原家住宅

灰が峰の山裾の長ノ木一帯は中心部から離れていたため空襲の被害を免れた。澤原家は１８世紀半ばのもので、現在も子孫が住いしている。改築修理も最小限にとどめているため、当時の姿をほぼそのまま留めている。
実はこの澤原邸の前を通る道が、明治初年まで広島と呉を結ぶ唯一の道であったという。普通車一台がやっと通れる道、今は舗装されているが、ここを浅野の殿様がこの地区視察のため往還、澤原家を宿にしたそうだ。残念ながら、他の家並は残っておらず、澤原家以外、往時を忍ぶものはない。

澤原家への道

平田さんから呉の町の成り立ちを聞くことができた。
呉は明治１７年（１８８４年）に軍港設置、鎮守府が置かれることが決まるまでは半農半漁の寒村であった。むしろこのあたりの中心は人口２千人の宮原村だった。しかし、その後は軍施設とともに街づくりが急ピッチでおこなわれた。碁盤の目状の区割りはその当時の名残である。街づくりに人夫、軍施設に軍人、軍属が全国から集まり、明治３５年には市制が敷かれ、明治の終わりころには川原石―呉駅―四道路―本通りに路面電車が広島より早く走った。人口も昭和に入ると４０万人を超えた。
平田さんは「中心市街地は空襲ですべて焼けたが、その当時の賑わいを感じることができるのが、この『呉まちあるきＭＡＰ』です」と、そこには中通りの鈴蘭灯、本通りの映画館「世界館」、呉市初のデパートメントストア「山下百貨店」、そして明治末期に開業した木造のビアガーデン…、平田さん「ここに入っていた飲食店が今でも中通などにありますよ。カレー、肉じゃがのいせ屋さんなんか…」。

田舎洋食いせ屋

私は帰路、田舎洋食いせ屋に入った。店には「まちあるき」の写真と同じものが壁に飾ってあった。肉じゃが、ハヤシライス、それに瓶ビールを注文。それとなく主人に話しかけると「私は三代目です。じいさんが軍艦でコックをしていたのですが、第一次世界大戦後の軍縮条約で乗船艦が無くなり、オカに上がり店を始めたんですよ。１９２０年です。次の東京オリンピックで１００年ですよ。」「いせ屋の屋号は…？」「じいさんの出身が三重県なもんで…」、恐らく呉市内には全国から集まった子孫が家業を継いでいるだろう、と思われる。そういえば呉の千福が海軍御用達のお陰で全国ブランドになったが、それについていせ屋の主人は「軍艦に色々な銘柄の酒を積み込んで航海を終えて帰ってきたとき、他は酢になっていたそうですが、千福だけは『お酒』だったそうですよ」。

れんが通り

中通り、れんが通り、本通り…、今やあまりに寂れている。呉の人口は周辺の町との広域合併を経た今でも２３万人に過ぎない。
平田さん「街並みを取材されるのであれば、両城地区の二百階段、百階段、映画『海猿』のロケ現場にもなりましたね。将校の洋館が残っています。それから川原石地区、ここには建築関係の方にとっても興味深い家並が残っていますよ」と。

平田さんは呉生れの呉育ちだが、５年間のアメリカ暮らしで多様な人種に触れたことで「大

きく変わった」と。「呉の人が呉を知らなさすぎる。街を元気にするため『シビックプライド＝地域への誇り』を育てる」とエネルギッシュに動き回っている。

（編集委員　三宅恭次）

## □ 編集後記

２０１７年の地価公示価格によると紙屋町は、坪あたり５２２万円で前年比１１％を超える上昇率であった。私達は、ここに少なくとも一万坪とみても時価５００億円は下らない大規模な土地を公有している。ここが空き地となってから早５年が経つ。

市が公表しているデータによると、ここが許可により利用できるようになってから、４年間(平成 25 年～平成 28 年)で利用日数が延べ２２７日で年平均６０日、来場者数は延べ３２０万人で年平均８０万人程度となっている。しかも大半は、〇〇まつり、〇〇フェスタである。こうしたイベントがない期間は、ご存じのとおり、ひとを寄せ付けない空き地である。実に一年間の６分の５の８３％が空き地である。

ひろしまの復興の証しともいえるこの地を７２年目から１００年に向かうまちづくりの核心として創りあげていくことを考え続けたいのだ。２０４５年〇月〇日は、秋晴れの日曜日、我が家は朝からうきうき！なのだ。

（編集委員　前岡智之）

***〇お知らせ：「時代を語り建築を語る会（第１７回 ）」開催***

**・語り人：藤本昌也氏（現代計画研究所会長）**

**・テーマ：基町再開発をどのように発想・デザインしたか**
**ー建築家大高正人のもとでの挑戦を振り返り、今を語る—**

・開催日：２０１７年６月２日（金）１８：３０～２０：３０

・会　場：合人社ウェンディひと・まちプラザ　研修室Ａ（北棟５階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）

・会　費：１０００円（資料費・会場費）、学生・院生は無料

・参加申込の連絡先：広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX：082-223-7226 メールアドレス：nisimar5@hotmail.com

**・主　催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表　石丸紀興）**

***＊メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて***

***皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！***

（投稿は５００字程度以内でお願いします）


編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次　元中国放送役員